







論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	岩佐 沙弥
論文担当者	主査  
	副査  
	副査  
学位論文名	Impact of functional independence and sociodemographic factors on post-stroke discharge destination in a super-aged rural community in Japan (超高齢化社会における脳卒中後の退院先に及ぼす機能的自立度と社会人口学的要因の影響)
論文審査の結果の要旨	
<p>脳卒中に対するリハビリテーション治療の目標のひとつは自宅退院である。自宅退院した脳卒中患者の約 50%は、ADL の介助を必要としている。ほとんどの場合、そのような介助は家族によって行われている。そのため、社会人口統計学的変化、特に高齢者人口の急増と世帯員の減少は、脳卒中患者の退院先に影響を及ぼしている。申請者は、機能的自立度と社会人口統計学的要因に着目して、日本の超高齢地域における脳卒中患者の退院先に影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的とし本研究を行なった。</p> <p>兵庫医科大学ささやま医療センター回復期リハビリテーション病棟に入院した脳卒中患者を対象とし、Functional Independence Measure の運動の点数 (FIM-motor) を説明変数として入院時と退院時に患者ごとに評価した。社会人口統計学的データ、および脳卒中の種類 (脳出血もしくは脳梗塞)、脳卒中の既往歴、脳卒中発症から当院の回復期リハビリテーション病院への転院までの日数、急性期治療を含む総入院期間、同居世帯人数、配偶者との同居、子供の人数などを収集した。目標値として、退院後の転帰を自宅退院群と介護施設入所群に分類した。</p> <p>対象は 160 例 (平均年齢±標準偏差、74.80±12.19 歳) であった。そのうち 114 名が自宅へ退院し、46 名が介護施設へ転院した。多変量ロジスティック回帰分析の結果、退院時の FIM-motor が高いこと、同居世帯人数が多いこと、配偶者と同居していることが、在宅復帰確率を高める最も強力な予測因子であることが示された。</p> <p>本研究は、日本の超高齢地域における脳卒中患者の退院先を予測する上で、機能的自立度と同居世帯人数が重要な因子であることを示している。</p> <p>本研究の知見は、機能的自立度の低い高齢患者にとって、自宅退院には支援的な社会的ネットワークが不可欠であることを示唆しており、今後高齢化が進みつつある世界の都市における長期的な健康管理の手がかりとなるものであり学位に値すると判断した。</p>	